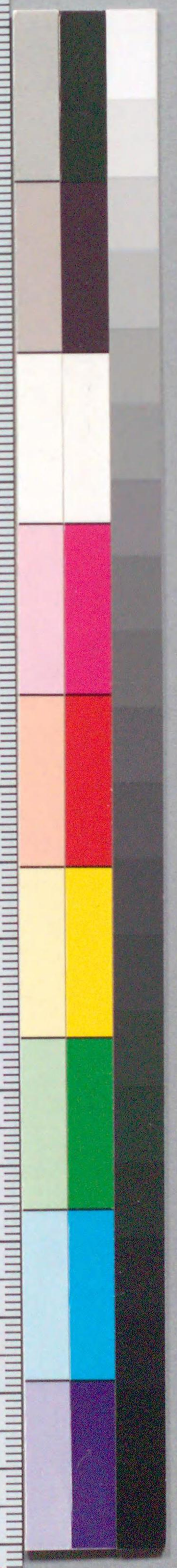




春色  
籬の梅  
十四

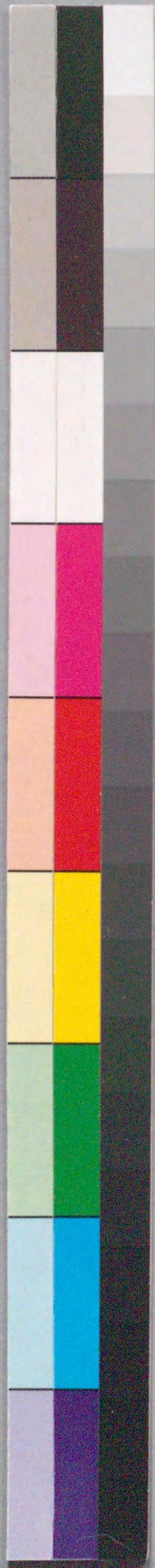
208  
15  
693



国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用





208  
15  
693

国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用





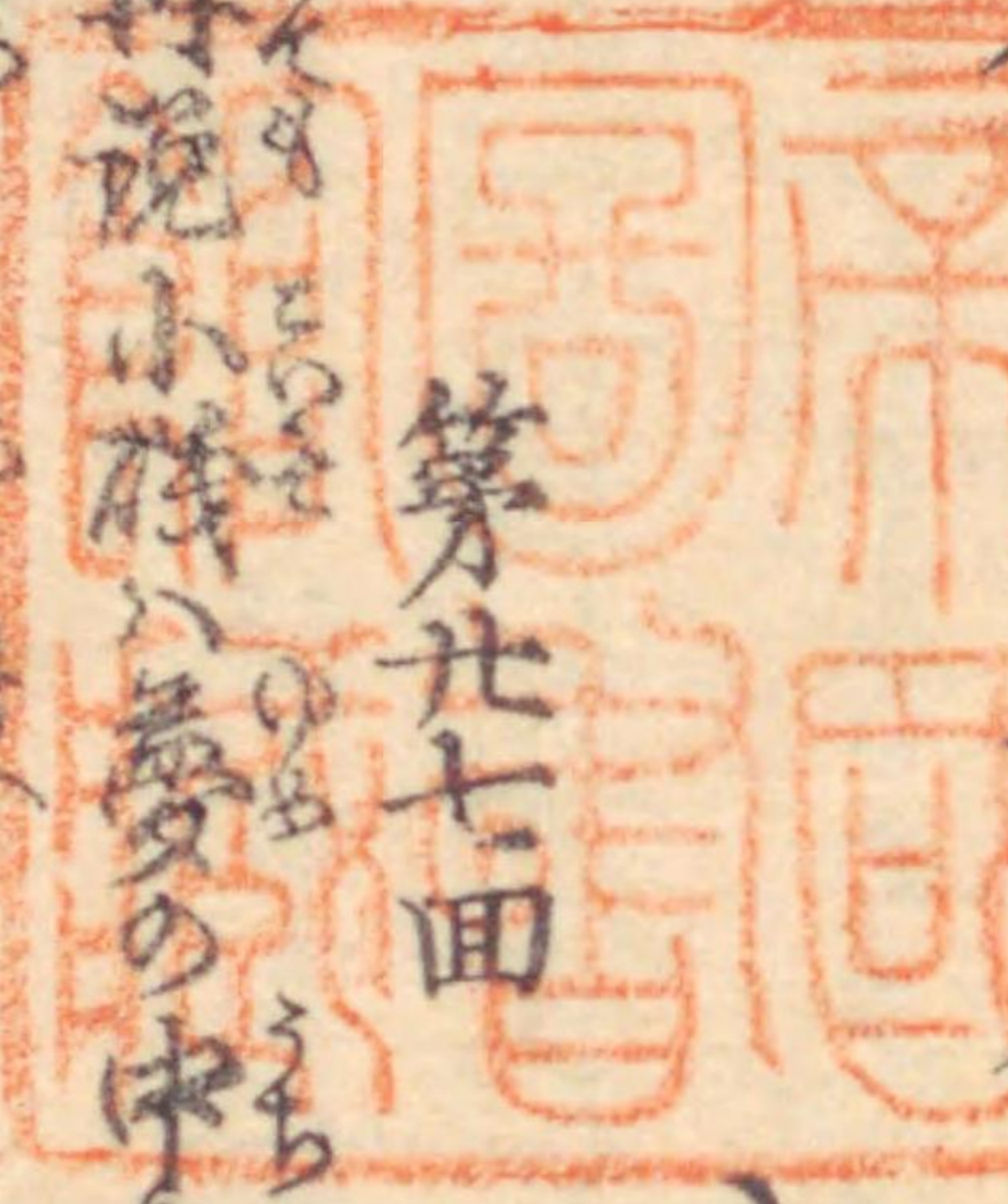
春色籬の梅卷之十四

江戸

狂訓亭主人著

第廿七回

再説小娘の夢の中ふたりは見る夢人のまごころ  
覚ても目の果ふちうつく梅の思ひきて春あめ後の  
正あで息女で中園で居るのさうおあや廊中候  
居しと居るるりるるら何れも嬉しくんと思ふも  
又苦ふるる男の公女の笑人あふ廊の好娘









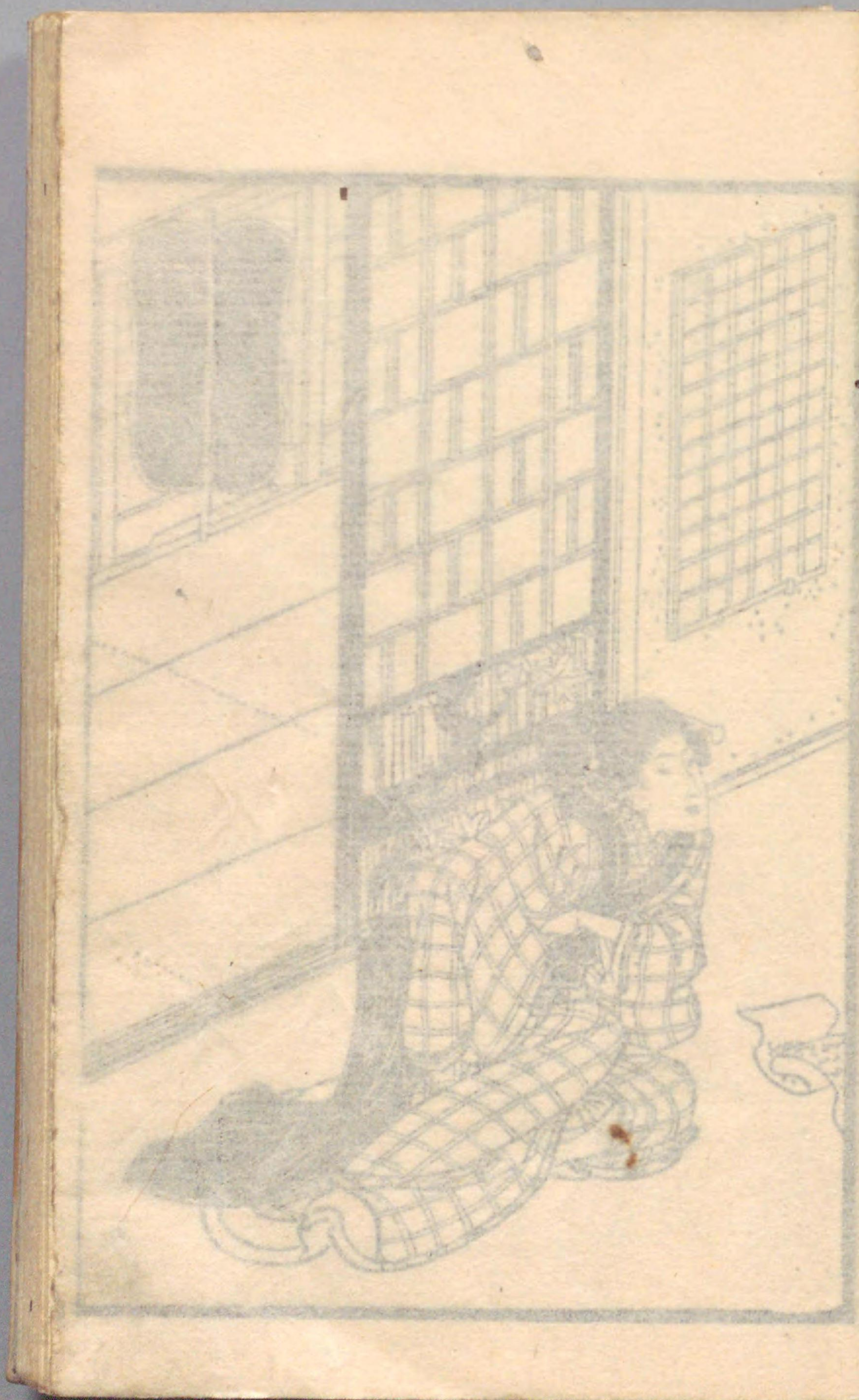




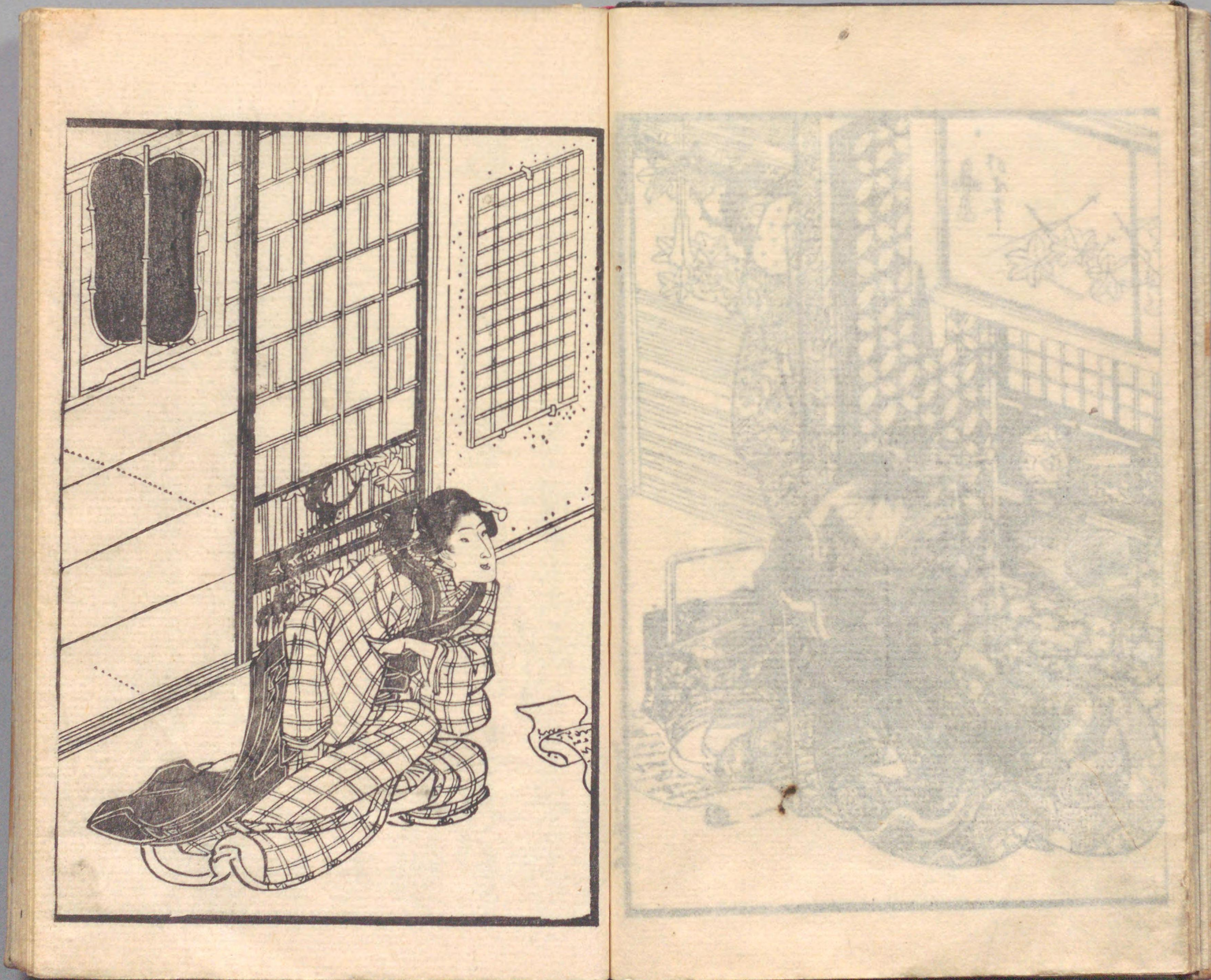
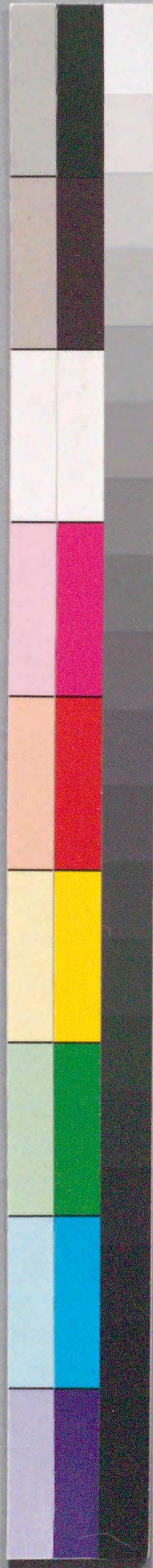
此の如くも考へておのれは命のいのちを  
 せんヨト言ひつらつらとまがひひとまがひつらつら  
 目元可電らしく古くも入て峯人の雨の  
 わる海棠の霜のいづれも仙苑の顔の増  
 善業さる春告鳥の美婦人 小侯の二の町  
 多ね安あり 清く小侯さん 小侯さん  
 言ふとおの身のの上をうすうすうすうす  
 膝をささめや 清くアノ

とお言ひの人の年比十八ぐらわを月の上のよわ  
 ありのあぬせんま 清くアノ  
 清く左様らうおがまが 清くアノ  
 小へ右様らうま 清くアノ  
 お家の居まうま 清くアノ  
 まんと言ひの時を私もお友達のまうま  
 仲様らう七居まうま 清くアノ  
 何りの沢で山勘番同様よあまらうま 清くアノ









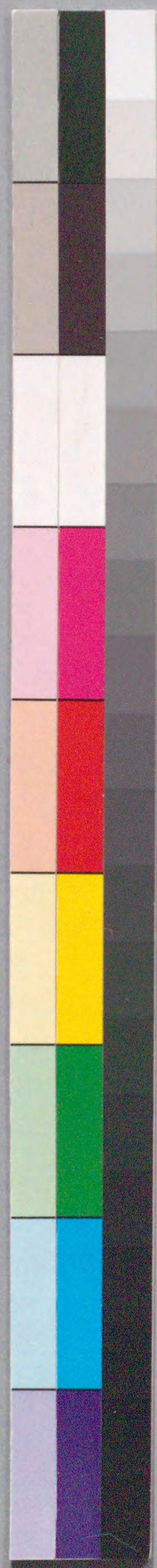






まして今も娘ぶんのまんの大さうしうく  
言ひまはるが實はは考へるゝ物体さう極むか  
まはよほしう昔の煙しやまをさう松がけ廊へ  
来せう余らどし七のをもありまはるア人言ひ  
長さんぐ達の内へ貸本をさんかありてお出のこ  
ちあそお同ふうつてとも見さかまお方ぐと  
らく活活をしと見ると昔の易くしと長さんて  
ありまこのサッラヤと色しやもの實情は長

さんへ貸本ををし七け廊の仲ふおはるるの  
ふ上覺ふ不思あなめのしよトあまう先か  
夢の極むとむま活活て小いふも  
あいのをありまはる上 借ハヤそん  
時もちやう長さんが貸本ををし七け廊のち  
居るゝお言のり上小ア 松まやまの  
おのちを居るまヨ 借ハ さらやその  
あまもやうお茶を長さんと煮し

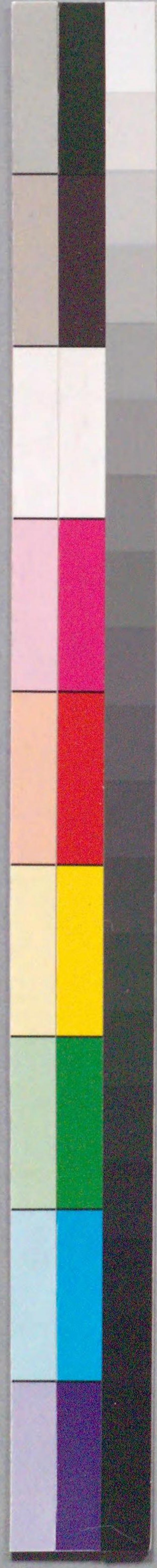




心と長さんおまゝお茶とて煮ひておのひま  
なるむかふ存つて夢あまをお見のこよ小十三長さんの  
かどや宛早秋の夜更のしきりさされておは奈  
だらうと思ひまはる何故とりみのおねまや元来  
く長さんのお氣あや入らばそのうぬ今ぢや  
あんな女地人おまお存じらうまうこお小おまを居  
らうしと思ひまはる情ぢや二る長さんごうてせん  
えのめやアはまたるおまけおまゝとふも何か  
おま

おま

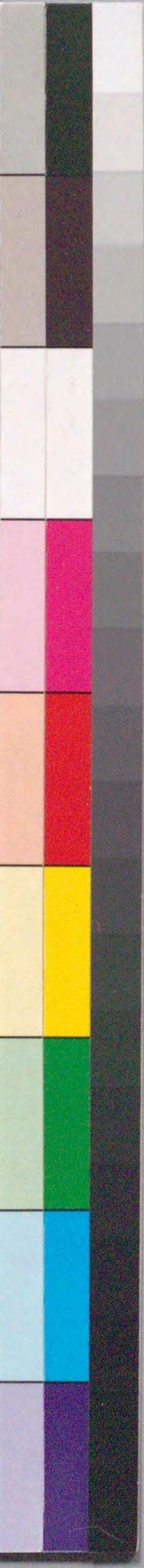
葉の白あがれおのこら様や奥女ごのうの通は  
るよ。ごご子孫ううこ言つてせんお不有ま  
情人のおまおのめも今お茶とんご長さんお  
逢つておの里おあまおげてお境まをくれま  
當座のわたを仕まはる情人が幾人おらうと共  
時めや長さんが見向も仕まはるあつちおあま  
せんヨ小おまゝとておめやんせんおまおま  
せんヨ情十三おまおのまがあるおらうおね





おれんのかほせとてあしんせけと彼んから  
振ふはまらけるあつらひらと思ひだす  
あてむらさ 清く早あたまめしなり  
あそ思ひだすからあつらひらと思ひだす  
くつと合も... けし家う後うあつらひら  
詩人もあつらひらと思ひだす  
話のあつらひらと思ひだす  
あつらひらと思ひだす

一人あつらひらと思ひだす  
小後の身へいさよをせ  
角の多満茶のうへ  
小へ ねまあつらひらと思ひだす  
あつらひらと思ひだす  
よあつらひらと思ひだす  
小後のあつらひらと思ひだす  
あつらひらと思ひだす





新編の情

近世花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
三冊 富永春英作

おんけやう 水た橋の昔やう 田方おんけやう  
増し 巻及はのてんてん 小冊は第の巻  
通の教受又書林が好いふらう 舞う 遠く  
心いふ身ははらばらけの好初 巻は梅の巻を  
狂仙亭主人 富永春英作

狂仙亭主人 富永春英作

第廿八回

おんけやう 水た橋の昔やう 田方おんけやう  
増し 巻及はのてんてん 小冊は第の巻  
通の教受又書林が好いふらう 舞う 遠く  
心いふ身ははらばらけの好初 巻は梅の巻を  
狂仙亭主人 富永春英作

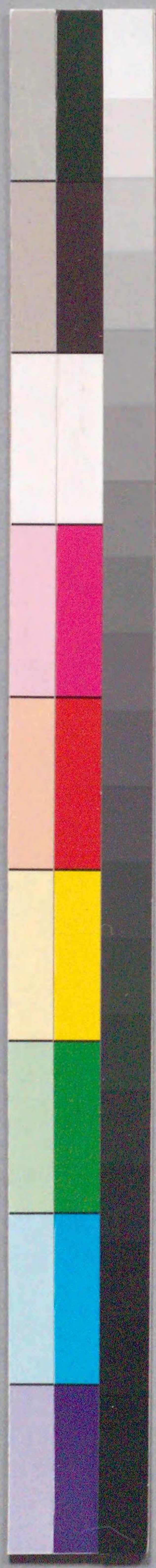






ち方う先と越しのヨ  
一文字を折の町う  
奥妓とお見まぬし  
美濃和一の樓で  
そんな温和の奥女  
ませんけきどける  
さあつこのどき後見

更と乃ましとわ入ト  
書サか殿さん  
かたのむげま  
お神が  
まあるま  
イ喰もの  
出舞妓さん  
ま可也相  
お筆の  
其も  
いん  
まぬを





































208  
15  
693

丸不人の志

右茶の私方一法あり他家不類なる一物なり世に不類  
茶多し其味物茶の味なる物名あり由古ホシ散茶あり中も  
上別な湯田前茶を利き湯方共同名の茶多し其茶の味平同粒中一而  
功効多し右茶用る人の腹痛もさう大痛の令とも出入り申疑ひ  
食し世に不似茶ありと大なる選あらず此茶あり多量の利きと  
食しその中二代と相續たるを死の候痛なき事ある  
解毒養童丸  
壹包代百銅  
半包代五十銅  
此の茶は心ぐくじと申す  
心ぐくじの茶あり  
心ぐくじの茶あり

御藥調合本家 東府隱醫 岡田三折製  
土賣弘所 江戸西國横山町三丁目 大坂屋半藏  
聚武別巻行名 笹屋辰多郎市原町所 因言方志の 葛巻行名 辰や安丸の

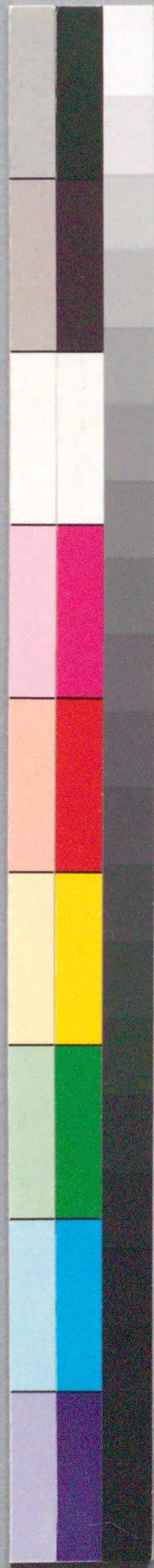




208  
15  
693







国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693



ガラス使用

